蘆花日記

一

大正三年五月
——大正四年六月

筑摩書房

蘆花日記　一

昭和六十年六月二十五日初版第一刷発行

定価　四五〇〇円

監修者　中野好夫
　　横山春一

発行者　布川角左衛門

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(営業)
　　東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式会社明和印刷
製本　株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替致します

Printed in Japan　0095—11001—4604

目

次

大正三年　五月五日　三
六月一日　二六
七月一日　五二
八月一日　八二
九月一日　一二六
十月一日　一五二
十一月一日　一九六
十一月四日（伊香保日記）　二〇三
十二月一日　二三一
大正四年　一月一日　二六五
二月一日　三〇二
三月一日　三三四
四月一日　三九〇
五月一日　四三三
六月一日　四八五
監修にあたって　五二五
解　題　五二九
蘆花徳冨健次郎年譜　五三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蘆花徳冨健次郎関係略系図　五四〇
注　索　引　五四三
大正六年当時の千歳村粕谷周辺略図

大正三年

（五月五日～十二月三十一日）

○大正三年五月五日　（火）　晴

今日からまた日記を書く。

五月五日若葉の節句、向ふの廻沢〔千歳村の字名〕や、中つ原〔粉谷内の一地名〕の杉の林の間には五月鯉幟が躍つて居る。

我ら夫婦結婚満二十年の当日で、朝餐の席には赤の飯若芽の汁が出来た。W一件の問題からO姉妹(1)は今朝もまづい顔をして居る。細君悶れた顔して食卓の上に独語して曰く、誰もお芽出度を云ふ人も無いと。

みのや〔お手伝いさん〕帰宅。予約年給参拾五円の外、五月は更に七円、六月より十二月まで更に毎月参円五拾銭宛やることにして、今月分七円渡す。養蚕傭、糸挽きとして、昨年迄は五月九円、六月以下十二月迄六円五拾銭宛貰つて居たからである。斯く優待してみのを引きとめんとしても、或は最早帰つて来ないかも知れぬと細君懸念する。荷物なども奇麗に片づけ、鳥小屋の内まであまり奇麗に掃除して、何から何まで残る隈なくして了ふて往つたからである。

お俊が東京に去ると云ふて荷物を片づけて居るさうだ。姉妹を奥へ呼んで懇々説諭。結局六月まで居るとお俊返答する。細君癇〈癇〉癪を起し、其様に不承々々に居る位なら居て貰はなくても好いと云ひすてゝ座を起つ。其あとで自分一人でまた懇々切々と姉妹に説諭。先生の御好意はさることながら、奥さんが最早寄生木の義理などはとくに済むだゞろうとサク〔お手伝いさん〕に云はれた、とお俊云ふ。寄生木の件なら、最初善平から懇々頼まれたから引受けたので、それについては此方に礼を云はれこそせめ、此方から礼する様な訳のものでは無い、自分ももとは義理を考へたが、今は情で行く、義理では行かぬつもり、お琴さんの婚礼に祝儀をやる事も、お俊さんに家を建てゝやる事も、善平君の情になつてすることで、義理でするではない、それを姉妹で他人心になつて、迷惑を眼前に見つゝ叱られて頭を下げるのがイヤと云ふて出て往く様では、家内が腹を立るも当然だと云ふ。結局お琴を細君の室にやつて、それとなく詫びを云はす。二時間あまりの話で、数学の難題でも扱つた様に大くたびれにくたびれた。

午餐の最中女客が来た。お琴サンが取り次ぐ。石川お文〔国民新聞の記者、石川六郎の後妻〕と浅村の二枝〔浅村成功の妻〕が子供を連れて来たのだ。やゝ久しく思案したあと、一旦裏のはなれにやつたが、自分縁から「二枝さん」と声をかけて手招きした。二枝さん

は明治四十四年の八月末もう来るなと云ふて浅村〔成功。東京帝大法科学生。のち東京朝日新聞の記者〕諸共赤の飯を食はして別れの杉〔蘆花は訪客をこの杉の下に立って見送るのが常であった〕まで送つて別れて以来はじめて来たのだ。静枝は其夏裏のはなれ住居中母の胎内に宿つたので、最早二度目の誕生を過ぎて片言をはなす。まる〳〵と肥えた活潑な女児である。手はじめに自分が抱く。

お文さんは同年の春、石川〔六郎〕共々追払つて以来はじめて来たのだ。四十五年の十一月お孝〔蘇峰の次女。夫は海老名弾正の長男一雄〕の婚礼に本郷会堂〔組合教会派の本郷教会。牧師は海老名弾正〕に会ふことは会ふたが。O姉妹の事から細君も気を腐らして居た芽出度かるべくして一向芽出度なかつた五月五日に、娘が二人帰つて来たのは天のはからひであるかの様に細君喜ぶ。自分も嬉しい。文公病気で入院中五月五日を約して今日訪問に来たのであるさうな。下高井戸〔京王電気軌道（現、京王帝都電鉄）の駅名〕で下りて来たのだ。

浅村は昨秋から兵営に入つて居るので、二枝さんは目下根岸に山本や蹋生に近く、六畳に荷物を置き二畳に起臥して、賃仕事して暮らして居るさうだ。大学はまた一度落第して、兵営を出てからまだ二年残つて居る云々。細君の部屋で話し、奥座敷で話し、藤棚の下で余がO姉妹も入れて写真を撮つたり、汁粉の馳走をしたり彼此六時近くなつて、お文サンはアイリスの切花や撫子花、カアネーションの株やら持ち、二枝さんは静枝を負て暇を告げた。二枝さんに小遣ひをやらうかと余程思つたが克己してやめた。静枝に大久保〔真次郎。実姉音羽子の夫。牧師。アメリカ在住〕土産のアメリカ人形と生みたての雞卵をやつた。

浅村夫婦は我等が子女とも云ふべきものなので、静枝は孫程に可愛かつた。お文には最早来るなと云ふた。お文が細君に泣いたさうだ。

二枝から柏餅、山本からバナナ、お文から胡瓜、風月の乾菓、鶴子[2]にメレンスのきれなどもらふた。二人に謙遜と忍耐を意味すると云ふので、紫のオダマキの花を櫛さしてやつた。

細君は昨日から若いオトなしい髪の結ひ方に変へたので、若やいで見えたが、二枝さんは自分を見て「先生が少しお年が寄つて」と云ふた、お文サンも「白髪がふえて」と云ふた。「皆がいぢめるから」と自分は答へた。

青山尊翁[3]からはがき。お常〔実姉の山川常子〕が帰京すると直ぐ逗子に帰るから来い云々。

仔細あつて参上は致兼ねます、御出下されば驩迎致しますが。
私も京都移住を見合せ少なくもこゝ一年は千歳住居と決しました、このたびまた地つづきの畑を二反ばかり求めました、心には笠被て草鞋はきながら。

五月五日　　健次郎

御両親様

と云ふ返事を認め、お文に頼み新宿から仕出す。
藤井瑞枝女史来状。一年ぶりの手紙。昨年の訪問記を書いて、見てもらひによこしたのだ。細君に対する識認が特色で、トルストイより余は幸福だと本野〔一郎。「順礼紀行」のときの駐露公使〕が云ふたと書いてある。
細君の為に慰籍〈藉〉となつた五月五日であつた。
林ちやん〔林蔵。塩田鉄五郎の三男。のち渡辺家〈養子。蘆花家の書生・農事手伝い〉〕に買つてもらつた菖蒲を入れて、久しぶりに今夜は菖蒲湯に入つた。

（1）O姉妹とは小説「寄生木」主人公のモデル小笠原善平の姉と妹、俊と琴。父は喜代助。蘆花は善平の稿本をもとにした「寄生木」を、明治四十二年十二月、自家の著作であるかのように発表したことに責任を感じてか、明治四十三年春頃から姉妹を引き取り、生活の面倒をみていた。
（2）鶴子は蘇峰の六女。明治四十一年九月二十八日から大正三年五月二十一日まで、蘆花の養女。入籍せず。当時、数え年九歳。
（3）父の一敬。蘇峰宅は東京市赤坂区青山南町六丁目にあり、当時、父は逗子から上京し蘇峰宅にいた。「魚翁」とも呼ばれている。地名の青山を、蘆花は蘇峰の別称としても使っている。

○五月六日　（水）　曇
まだ鯉が躍つて居る。廻沢の方には太鼓が鳴る。子供子守が大勢遊むで歩るく。死にさうな声を聞きつけて出て見たら、千代吉が白襦袢股引腹かけで、酔つぱらつて中つ原の田甫〈圃〉路を歌ひながら往つたり来たりして居るのであつた。
昨日のくたびれで、終日茫々然と過ごす。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

津田沼騎兵聯隊の今田某からよこした原稿を封のまゝ小包で返送。
秋山の八重夫婦が御庭拝見に来た。許して会はず。
虞美人艸が今年の初花を開いた。
五時過ぎみのが帰つて来た。一安心。弟が捕つたはへと小豆をくれた。
葭切りがぺちやくちやおしやべりする。何処を見ても真青だ。
早稲田文学に出て居る五十嵐〔力。国文学者。早大教授〕の「半農生活其まゝ」を読むで面白かつた。其内に自宅植物の数を書いてあるので、夕飯後、細君と試みに吾前庭後園の樹木（草本を除く）の種類を数へたら、百を越した。松と云つて、赤松、黒松、姫小松、朝鮮〔五〕葉、皆一種目に包含さしたのだから、類を挙げたら中々多数に上るであらう。
朧月の下に庭の椅子に夫婦倚つて居ると、琴子が来たから呼び寄せて、最早姉妹の位置が顚倒して居るから今後はよく〳〵注意せねばならぬ、姉にまづい事があると妹の責任だと云ひ聞かす。琴子は、ドウしてあゝ時々ふら〳〵と姉の云ふなりになる〔の〕でせうと云ふた。自身が十五六で、今からお傍に居られると好いに、屹度他日後悔する事があらうと思ひます、と云ふた。

○五月七日（木）晴
藤井瑞枝の訪問記を訂正してはがきを添へて郵送。
仕事日で隣の林が来た。昨日興農園〔種苗農具店〕から届いた小芋、八頭芋を合せて、先日林が買つて来たの共、十五本植付。里芋全盛の年と云ふべしだ。
民友社の便に須永秀雄〔蘇峰の抱え車夫〕が来た。不如帰、青蘆集、自然と人生等印税百円を持て来たのだ。一旦請取つたが、不図思ひついて左の手紙を添へて鈴木秀雄〔民友社の経理担当。蘇峰夫人の実兄〕にかへす。

愈御壮健奉賀候

小生も永々民友社の脛をかぢり居候処、今月今日然る可からずと思ひ当り候間、遅蒔ながら今回の分より御返却に及び候。向後は原稿料印税等一切御つかはしに及び不申、仮令御つかはしなされ候共、一々御返却の煩を来すのみにつき左様御承知下されたく、尚あまりしつこき様候得共、何等の名義にても小生の為に積立保管等なされ間敷願上候。不取敢右要用のみ。

五月七日　　徳冨健次郎

鈴木秀雄様

本当なれば明治三十六年一月、断然民友社と絶つた時(1)に此手紙は往かねばならぬところであつたのだ。須永に五円やる。あとで聞けば、同人も例の一件(2)が上告になり、中々長びきさうなので、家族をまとめて一先づ岐阜在に帰るさうだ。気の毒である。

猫のタマが居ないと大騒ぎし、一同絶望して居たら夕方疲れきつて帰つて来た。養蚕季節で屹度誰かに抱かれて往つたのを、性の強い猫だけに兎やらかうやら帰つて来たのであらう。

(1) いわゆる「黒潮」事件。明治三十五年末「国民新聞」に送った「霜枯日記」の無断削除に憤り、兄蘇峰との告別を決意し、一月、自ら黒潮社を興し、二月、「黒潮」を自費出版、巻頭に兄への告別の辞を掲げた。兄弟最初の絶交。

(2) 大正二年二月十日、護憲派群衆による国民新聞社襲撃事件の際、須永秀雄がピストルを発射し、群衆の一人を死なせた事件。

○五月八日　（金）　曇

近来空気が濁つて、朝日夕日が紅提灯の様に日中も日蝕の様なことがある。不思議な大正三年だから、何か大々的天変でもあるのかも知れぬなど思ふ。椅子テーブルを座敷に持込む。

林入る。甘藷の鞍作り、フレーム撤去。

自家の茶摘をはじめる。

○五月九日　（土）　晴

茶摘及製茶の第一回。

縞蛇一疋殺し、山かゞしを半殺にした。

下曽根〔信守。千歳教会牧師〕が来て会堂屋根葺きの礼を述べ、博覧会みやげ〔上野公園で東京大正博覧会があった〕の秋田梨五個、台湾木瓜一缶くれた。

二枝坊から礼状。

○五月十日　（日）　曇

早朝関餘作〔関寛斎の三男。医者〕が来た。一家六人に種痘してくれた。午餐を食ふて帰る。露西亜語を是非やれと云ふて、語学初歩を二巻無理に置いて往った。

大江保吉〔出版社大江書房主人〕が来たが、来客中と云ふて面会しなかつた。

田中の新家から稗を壱石五円で買ふ。

去る日の手紙以後実は日々父上母上を心待ちして居たが、到頭来ぬ。今日は逗子に帰る日だ。午后自動車の響がしたので、細君が遽たゞしく自分を喚んだが、それは野村新橋堂〔野村鈴助。出版社主人〕だつた。みゝずの縮刷をするについての相談に来たのだ。壱万刷つて、卸を参割弐分引きにするからと云ふので、印税を壱割五分にまけてやる。壱割にでもと此方から云ふたが、壱割五分でよいと先方から云ふたのである。服部〔出版社服部書店。店主服部国太郎は前年死去〕には印税壱割やつて居るさうだ。先日註文した原稿紙弐千枚、註文した書及雑誌、風月の柏餅など持て来た。

但馬から一高受験に出て来た二青年に一寸面会。

民友社の鈴木秀雄から印税辞退に関する承知の返事。先々これで民友社との交渉も絶へたわけだ。

土岐松也から義母の八丈嶋から送つた干蕨と新茶を小包でよこした。

先日手紙をよこした橋本とみと云ふ娘が来た。廿二歳、近眼鏡をかけて居る。職業学校出で、全家クリスチャンださ

うだ。お琴サンに奥さんでございますかなど挨拶するから、疎忽を叱つた。あとで食堂に呼むで、千鳥〔曲琴〕などひかせ、カアネーションの花をやつて帰へした。

天気のせいか、何に頭を過労したのか、今日は頭がぐらくして二度ばかり昏倒しさうになつた。少し梨の袋をかぶせた。

夜は一同食堂で讃美歌など歌ふた。

○五月十一日　（月）　午后雨

「ルーラン」〔北海道探勝の紀行文集〕著者〔河合裸石〕の新著の序と、「子の観たるトルストイ」〔著者はトルストイの次男、イリヤ。トルストイ。訳者は播磨稽吉〕の序と、藤田寛太郎の序と書かねばならぬ。それから「みゝず」後半の訂正もしなければならぬ。一向気が向かぬので懊々悩々。

此の若葉の好い時節に、下手な文章書くなんか是も亦甚害である。

福本日南〔史論家。新聞記者〕の元禄快挙真相録〔元禄快挙録の増補新版〕を見て半日の余過した。中々面白い。

午后お俊お琴に鳥小屋内の梨の袋かぶせをはじめさす。

夜はお琴おみのを強ひて、古いラツパ節〔明治三十八、九年ごろ流行した演歌。添田啞蟬坊作詞作曲〕を習ふ。

倒れし戦友抱き起し　耳に口当て名を呼べば
につこと笑ふて眼に涙　鉄嶺占領まだかいな
トコトツトツトツト

降り積む雪は絶間なく　障子明くれば銀世界
嘸や満洲はつめたかろ　思へば涙がさきに立つ

親の財産当てにすりや　薬缶頭が邪魔になる

親爺入れる様な火消壺　おこるたんびに蓋をする

○五月十二日　（火）　夜雨

不相変頭が重い。

姫萱草、花菱草、虞美人草、除虫菊、黄花アイリス、カアネーション、昇り藤などが庭園を彩どる。蛙の声、葭きり、雲雀の声。燕の夫婦が家内に度々舞ひ込む。

今日は照り上りで、寒暖計が七十八度〔華氏〕に上つた。

午后六連報の署名人で三十一歳になる〔原本で約二字分空白〕と云ふ男が、「蛇」と云ふ小説の原稿を携へ、五十円で売りたいから書肆に紹介してくれと云ふて来た。与謝野〔鉄幹・晶子夫妻〕から教はつて来たさうだ。下関から芸者を連れ出して（義侠的にと云ふ）来たのださうだ。謝絶。電車賃もないからと云つて、三軒茶屋から歩いて来て、歩いて往つた。

長谷井〔松〕からダーリヤ二十根、興農園から赤芽芋。橋本とみから長手紙。岸川艶から第二の手紙、返事が欲しいのだ。瑞枝から受取。憲次〔林憲次。愛子夫人の従弟〕も今夜の汽車で吉川〔巌。帰農精神の鼓吹者。このころ北海道北見の国に移住〕の細君〔民子〕を北海道まで送るとのはがき。

夜ランプをつけて「莽蒼たる北海道」の序を書いた。雨淋漓、蛙声閣々。

権兵衛〔山本権兵衛。大正二年首相となつたが、この年三月、シーメンス事件で総辞職。海軍大将〕、実〔斎藤実。海軍大将〕が予備になり、財部〔彪。海軍大将〕が待命になつた。身から出た錆とは云へ、気の毒でないでもない。

○五月十三日　（水）　曇

「莽蒼たる北海道」の序文をやつと書き終へて郵送。廿字十行のものたつた四枚を何日も何日もかゝつて、何と云ふざまであらう。自分自身にも愛想がつきる。

長谷井にダリヤの礼のはがき出す。これもはがきを六七枚書きつぶしたあとで。
林入る。甘藷苗植込。白六十余本、紅五百余本。先日貸した川砂を塩田〔粕谷の住人〕からかへした。
花壇の球根類を掘り上げ貯蔵。ちと早いが。
琴子を買物に東京にやつた。
天野〔藤男〕の「田園趣味」が送つて来た。自分の序文は木版にして入れてある。

○五月十四日　（木）　降つたり照つたりまた降つたり
あとの序文二つを暫く後廻はしにして、今日はみゝずの訂正をした。関翁[1]の記事である。愚文俗文悪文。
みゝず（縮刷）校正の第一回が来た。
秋田の西山つたと云ふ三十女から手紙。近頃は女の手紙がよく来る。先生御機嫌不斜（ななめならず）焉。
林蔵入る。甘藍苗移植、南瓜苗二十六本植込。南瓜苗十銭、甘藷苗及午〈牛〉（ママ）（ご）芳（ぼう）代八十銭林に渡す。
夕方、和田婆サンが来た。
夜、塩田へ払ひの不明の弐拾銭が導火線になつて、廊下で細君の頭髪をつかみ、拳固で細君の頭を三つなぐる。蓋（けだし）無罪無邪気なる蝿の林蔵が自分の頭にさはり、お俊、お琴が細君の頭に障つて居る結果なのだ。めでたくかしこ。

（1）関寛。医者。戊辰戦争時の官軍の軍医、徳島での開業医生活をへて、明治三十五年、七十二歳で開拓を志し北海道に移住。明治四十一年、蘆花を訪ねて親交を持った。大正元年十月、自殺。「みみずのたはこと」の記事は「関寛翁」。

○五月十五日　（金）　雨
雨尽日。みゝずの訂正。
北海道の小林広と云ふ人から身欠鰊（みがきにしん）を小包で沢山に送つて来た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com